



今回で35回目だが、すでに長州藩と津和野藩との国境、野坂峠に到着している。ただし、本文にもあるように最終回では、長州と津和野藩の関わりについても述べたいし、また是非雲上の津和野城のイラストをご覧いただきたいという思惑からなのである。イラストは、この時一緒に歩いた語り部仲間のMさんと家内、そして中央がガイドしていただいた「NPOあとう」のSさんである。この地点、あまり峠

イラストでたどる
石州街道

35

野坂峠



野坂御番所から国道9号線を離れて左側の道を1キロ弱進むと、そこが津和野藩との国境、野坂峠である。峠には一里塚が立てられており「是より小郡津市へ拾貳里式拾八町、是より萩松本迄拾里」と記されていた。さらに藩主が御国廻りの際に休憩する駕籠建場も設けられていた。峠の真ん中には立石があった。それは「野坂駕籠建場絵図」に「一里塚」と同等の大きさと明記されているが、どういった意味合いのものであったのかは不明。付近は明治期に道路拡張や掘り下げを行ったため当時の雰囲気が残されていないのが残念である。長州藩の石州街道は野坂峠までであるが、最終回では野坂峠から津和野までの下りと幕末の長州藩と津和野藩との関係に触れたい。

文イラスト II
古谷眞之助

らしくない風情だが、3人が立っているところが紛れもなく国境で、背後が山口市側、つまり長州藩、手前が津和野藩となる。一応しっかりした道路だが、今では峠の下にトンネルが設けられているから、ここで車に出会うことは滅多にないようで、実際1台も合わなかった。イラストの左手に、かつては一里塚が立っていたようだが、現在は失われている。この時いただいたパンフには御国廻り行程記の徳佐付近の絵図が掲載されており、野坂峠には道の両側に一里塚と立石が描かれている。おそらく長州藩と津和野藩がそれぞれ建てたので二つあったのだろう。二つの立石のうち長州側のものは「百叩きの石」と呼ばれており、長州藩内で罪を犯した者はここで百叩きの刑を受け津和野藩に追放されたため、そのように呼ばれたという記述を見つけた。一方、津和野藩側の立石では、藩内で罪を犯せば、百叩きではなく、ここで髪を切られた上で長州藩に追放されたため、津和野藩ではこの石を「剃刀の石」と呼んだそうである。刑罰の種類は違っていても、両藩は互いに罪人を他藩に放逐するというわけで、何となく臭いものに蓋的な対応が気になる。問題にならなかったのだろうか。

峠から津和野側に下ると津和野側の旧道に入るが、その入り口には茶屋があったという。そこから5分も下ると、石畳がかすかに残っている。さらにそこから標高差約200mを下れば、もう津和野の城下町である。一応ここまでで、小郡の津市から始まった約55kmの石州街道歩きも完了となる。長州藩では主要街道を大道と言ったが、その二つを歩いたことになる。さてそれでは次はどこか。山代街道か赤間ヶ関街道か、それとも山陽道もありか。今年72歳になるが、何とかもう一つ、街道を踏破したいものである。(2025.2.20 記)